

平成24年度宮古群島病害虫発生予報第2号(5月予報)

I 5月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日照時間
高い(多い)	40	50	20
平年並	40	30	30
低い(少ない)	20	20	50

(平成24年4月20日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	24.8	27.5	22.7	207.7	151.5

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 5月の発生予報および防除上の注意事項

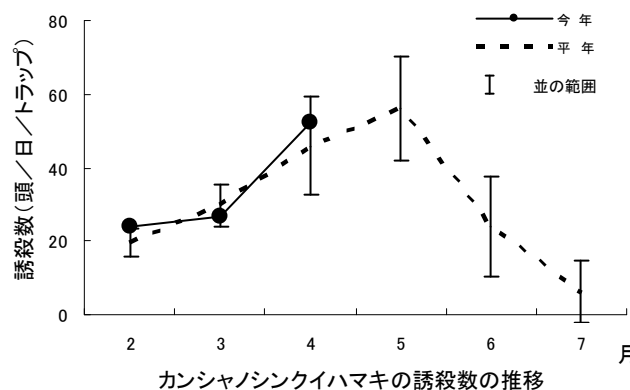
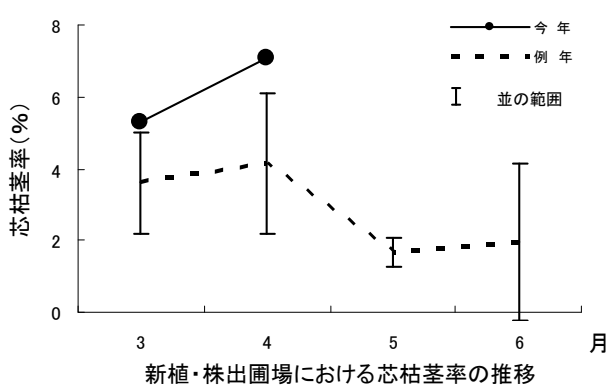
1 さとうきび

(1) メイチュウ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

- a 4月下旬の調査の結果、新植・株出圃場における芯枯茎率は7.1%(前年5.3%、例年4.1%)と例年より高かった。
- b 4月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによる、トラップ当たり日当たり誘殺虫数は52.2頭(前年26.6頭、平年45.9頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- c 植付時や培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。
- d 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号(平成24年4月5日付)参照。

- サキシマカンシャクシコメツキ(ハリガネムシ)の防除対策
 - a 4月の合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は、0.5頭(前年0.2頭、平年0.6頭)と平年並であった。
 - b 更新圃場は速やかに古株などの残渣を処理し、植え付けまでに数回耕耘して幼虫密度の低減を図る。
 - c 培土時に他の土壌害虫の防除も兼ねた薬剤を選定し施用する。
- アオドウガネの防除対策
 - a 予察灯による本種成虫の捕獲数は例年5月から急増し、6～7月にピークを迎える。
 - b 宮古地区においては、4月下旬から全域に誘殺灯が設置されている。地域全体で次世代の密度低減を図るため、誘殺灯を適切に管理する。

2 マンゴー

- 炭疽病の防除対策
 - a 4月中旬の調査の結果、一部施設で炭疽病の発生がみられた。
 - b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、袋がけ前までの防除対策が重要である。
 - c 罹病した新梢、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
 - d 果実肥大期は、治療効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 開花期以降は本種が増加する可能性があるため、早期発見・早期防除に努める。
 - b 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
 - c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
 - d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
- ハダニ類の防除対策
 - a 4月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭未満(前年2.2頭、平年1.5頭)と平年より少なかったが、一部圃場で多発がみられた。
 - b 5月は果実肥大期にあたるので、袋がけ前の防除を徹底する。

3 とうがん(施設)

- ミナミキイロアザミウマの防除対策
 - a 4月中旬の調査の結果、ミナミキイロアザミウマの葉当たり成虫数は2.6頭(前年0.1頭、例年1.2頭)、つる先当たりの成虫数は5.2頭(前年1.1頭、例年4.7頭)と例年よりやや多かった。
 - b 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
 - c 施設の出入口、天窗、側窓にはネット資材等を張り成虫の飛来侵入を防ぐ。
 - d 摘葉等による残渣は本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。
 - e 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
 - f 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

4 ながうり(施設)

- うどんこ病の防除対策
 - a 4月中旬の調査の結果、うどんこ病の発病葉率は22.2%(前年36.5%、例年22.1%)と例年並であった。
 - b 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
 - c 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして持ち出し処分する。
 - d 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
 - e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。